令和２年４月号

◆八木健　選　～戸恒東人の滑稽俳句②～

秋冷やベンチに一つづつの 黙(もだ)

風景を描いて作者の感じた感興を読者と共有できるところに俳句の良さがある。俳句が読者とつくり上げる文芸だという所以である。掲出句は公園の風景である。ベンチそれぞれに一人がぽつんとかけている。黙には孤独とも孤高ともとれる存在感がある。それぞれに秋冷を楽しんでいるようにも見える。自分も空いているベンチのひとつに腰かけて一句詠む「秋冷のベンチの黙に加はれり」。句の風景の中に思わず入り込んでしまった。

右に倣ふことの安堵や浮寝鳥

「この冬はこの池で過ごすのかい」「そうだね。たくさん先輩がいるんだし安心じゃろ」「右に倣えの安堵だな」。鳥達の会話はこんなものだろう。浮き寝鳥を擬人化して詠んでいるようにも読めるが、浮寝鳥を取り合わせとして人間のことを描いているようにも読める。そして、その人間とはサラリーマンや一般庶民のことであり、自分自身のことでもある。

火蛾舞ふや手配写真に髭足され

駅舎か交番か、おそらくは実景と思われる。火蛾が舞うという怪しげな気配の中に強面の指名手配犯の顔写真がある。しかし、よく見ると写真の髭はいたずらで描き足されたものであった。下五で一気に滑稽句へと反転する可笑しさ。

向日葵のもう一伸びといふうなじ

「うなじ」は後頭部で首のつけ根にあたる。動物の場合、人も勿論だが最も無防備な部分であり、女性のうなじは男性にとって魅力的なポイントである。だから和装では「襟足」の着こなしを重要視する。向日葵がもう一息成長するパワーを作者は感じたのだろうが、擬人化の可笑しさがいい。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

手柄話ますますふくれ 薬喰（くすりぐい）

古来、日本人には動物の肉を食べることを戒める考え方があったが、寒に限って滋養のために獣肉を食べることを「薬喰」といった。俳句では冬の季語で、歳時記によっては獣肉の中でも特に鹿の肉を指す。手柄話は獣を仕留めた武勇伝であろう。鍋を前に身振り手振りで熱演する語り手の姿が見えてくる。話の内容は時に誇張されて聞き手を喜ばすが、「ますますふくれ」の表現が可笑しさを醸し出している。誇張は滑稽の第一歩である。

ハンカチの花に手を振り別れけり

ハンカチの木はハンカチのような花をつける。四月から五月頃に咲く。中国が原産。花とみえる部分は苞であるが、誰かがハンカチをぶら下げたように見えるから面白い。立ち去るときにハンカチの木がハンカチを振っているのだから作者も振るのだというわけである。これも擬人化の楽しさ。

すぐ終る挨拶がよし忘年会

俳句結社の主宰で俳人協会の理事長もなさった方だから忘年会で挨拶をする機会は多い。「すぐ終わる挨拶」は自戒でもあろうが、招待客に挨拶をお願いして長広舌に手を焼くことも多かったかもしれない。「俳人は挨拶が下手なんだよ。普段五七五で縛られてるから反作用なのかね」。戸恒さんのぼやきが聞こえてきそうな一句である。

囀りや秘密厳守といふ脆さ

小鳥たちの軽やかな饒舌を、先人たちは「囀り」という季語にした。俳句は季語に接して脳裏に浮かぶことを書く。小鳥たちはお喋りを楽しんでいるなあ。人間も会話を楽しんでは脱線することもあるなあ。サービス過剰で「ここだけの話」の花が満開となる。お喋りに潜む危険を発見した句。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

天の字に裾の払はれ秋の富士

書道で斜め下方にのびやかに筆を払うように抜く筆さばきを「はらう」という。天の字はのびやかに左右に払われている。天の字の裾ののびやかさに富士の雄大さを感じる直観をそのまま描いて面白い句となった。

すべからく火種は人事鳳仙花

部下を持ち、人事を担当された作者の実感句であろうが、鳳仙花と取り合わせたところが最高に可笑しいね。どちらも一触即発、うっかり触ると大ごとに。火種になることを承知の上での人事と、生存をかけて弾ける鳳仙花の組み合わせで句に可笑しさと奥行きが生まれた。

戸恒東人:一九四五年、昭和二十年、茨城県生まれ。句集に『福耳』『白星』『淅瀝』『学舎』『令風』などがあり、俳句の教本の『間違いやすい俳句表現』『クイズで学ぶ俳句講座』など執筆多数。評論『誓子―わがこころの帆』で加藤郁乎賞受賞。大蔵省造幣局長、帝京大学教授、俳人協会理事長などの要職を歴任し、平成二十九年には、瑞宝中綬章を受章。

＊「第九六回八木健の俳句遊遊」（愛媛ＣＡＴＶ）の「今月の一句」で直筆の色紙紹介。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。